



特別支援教育は人間理解の教育です

—誰もが障がいについて知り、サポートできる社会を目指して



保健学博士・音楽療法士こども家族早期発達支援学会会長

星山麻木さん

聞き手 太田美田紀（ライター）

子育て支援や早期発達支援を中心に、行政や企業と連携しながらサポーターの育成、療育や特別教育の実践などを行う星山麻木さん。音楽療法とムーブメント療法を組み合わせたワークショップは人気が高く、障がいがあるないにかかわらず、誰もが楽しめ、親子が一緒に笑顔になれると評判です。特別支援や子育て支援に必要な視点についてお話をうかがいました。

養護学校の音楽教師としてスタート

—現在、子育て支援や早期発達支援などを中心に幅広い活動をされています。大学卒業当時は音楽の教員もなさっていたそうですね。

星山 もともと音楽は大好きで、縦笛が大好きだったので。小学校6年生のころから音楽の先生を目指すようになりまして。念願叶ってフルートで大学の音楽科に入学したんですけど、間違えず、より正確に演奏することや、人と競争して評価される音楽を意識す

るようになりました。大好きだった音楽が楽しくなくなると、音楽の先生になりたくないと思うようになってしまったんです。

進路も決まらないまま大学卒業を迎えるころ、師事していたフルート奏者の小出信也先生の紹介で神奈川県立鎌倉養護学校の校長先生から音楽の先生を探しているとお話がありました。

「この子たちは障がいがあるけど、とにかく音楽が大好きなんです。引き受けてくださいますよね？」

私は音楽教員の勉強だけで、障害児教育（現・特別支援教育）を勉強していなかったのですが、断りきれずに引

PROFILE ●ほしやま・あさぎ●

明星大学教育学部教育学科教授、日本音楽療法学会認定音楽療法士。こども家族早期発達支援学会会長。サポーター育星プロジェクト研究協会代表。ユニバーサル音楽ワークショップ研究会代表。東京学芸大学音楽科卒業後、養護学校で音楽教師を務めたのち、横浜国立大学大学院修士課程（障害児教育）、東京大学大学院医学系研究科国際保健学専攻（母子保健学）博士課程を修了。メルボルン大学客員研究員（早期介入）、鳴門教育大学障害児教育講座助教授を経て2010年から現職。映画『星の国から孫ふたり』（2009年作品）監修。行政や教育委員会と連携し、さまざまな地域の子育て支援、サポーター育成、早期発達支援、ワークショップの開発、療育や特別教育の実践を行う。

き受けてしまつて。1カ月後には、いきなり養護学校高等部の1年生13人を担任することになりました。

—養護学校ではどんなことが大変でし

たか。

星山 担任といっても複数担任でしたが、筋ジストロフィーなど肢体不自由児のクラスを受け持ちました。実際に働き始めてから、「どうやってこの子たちに音楽を教えればいいんだろう」と考えるような状態で、病気のことも指導法も、やればやるほど分からないことだらけでした。

さらに、周りを見渡したらほかの先生もみんな同じような状態でした。専門の勉強をしている人がいないんです。教員免許取得に、障害児（現・特別支援）教育は必修ではありません。それに、養護（現・特別支援）学校教諭の免許がなくても養護学校の教員になれたので、免許を持っている人はかなり少なかったんですね。今でも、特別支援学級などでは、教員免許があれば教えられます。

より専門的な知識が必要なはずなの

日本には、子どもたちの早期療育をコーディネートしてくれる人もいませんでした。お母さんや家族を支えるシステムや人材もありませんでした。コーディネート者を育てたい、お母さんたちをサポートし、お母さんたち自身も育てたいと私が思うようになったのは、そのころからです。

あのとき教わったことを伝えて恩返ししたい

—大学の教育学部の学生のほかにも、サポーターの育成活動を活発になさっていますね。

星山 今一番大切に思っているのは人材を育成することです。教員、保育士、幼稚園の先生になっていく教育学部の学生を育てることがまずひとつの大きな柱で、支援の必要な子どもたちもいていねいに支援できる先生を育てたいという思いがあります。



にと、とても疑問に思ったし、大きな矛盾を感じました。そして何より、自分自身もまさにそうでしたから、きちんと勉強しようと思って4年働いて退職し、大学院に進学しました。

学べば学ぶほどすべきことが見えてきた

—大学院に進学して、障害児教育を学ばれたのですか。

星山 ええ。学ぶほどに興味がわいて、

また、先生だけで一生懸命頑張っても、とかく保護者と対立してしまうという状況があります。そこで、お母さんたちから特別支援サポーターを育てたいこうと、サポーター育星プロジェクト研究協会を立ち上げ、サポーターの育成を始めています。5、6年ほど前のことです。ちょうど同じころ、国

が特別支援教育支援員という制度を導入しましたが、教員をサポートする支援員を保護者のみなさんや地域の方から育てることで、お互いの理解が深まり、より支え合えると期待しています。最初に担任した養護学校のお子さんのうち、もう半分くらいは亡くなっています。最初に担任したお子さんのひとは高校2年生の夏に亡くなりました。担任を初めて持った翌年のことです。そのお母さんはその子のことをとんでも大事にしていたけれども、お子さんのほうが早く亡くなってしまいました。自閉症の子を授かって、育て方が

横浜国立大学の大学院で2年学んだ後、インターン制度を使ってカナダのアルバータ州の特別支援学校で3カ月働きました。その後はアメリカで音楽療法の勉強をしました。帰国後、東京大学大学院の医学系研究科の母子保健学講座（現・発達医学分野）に進み、日暮眞先生（現・東京大学名誉教授）に出会いました。

就学前の早期療育はまだ研究されていなかったこともそのときに知りましたし、同級生は保健師か看護婦でしたが、医療領域にも療育の専門家はいませんでした。じゃあ、海外はどうだろうと、博士の後期課程にはオーストラリアのメルボルン大学にも在外研究に行ってみたのです。

そうしてあらためて世界を見たら、子どもの療育は3歳以前から始まっていた。さらに、子どもだけでなく、家族を支える視点をメルボルン大学の研究者から学んで、目が開かれました。

分ならず、自ら命を絶ったお母さんもいました。

悲しいことがたくさんありました。私は当時、お母さんたちからいろんなことを教わりました。たまたま障がいのある子を授かり、一生懸命子育てしているのに、どうにもならなくて泣

サポーター育星プロジェクト研究協会

療育キャンプ、ウインタースクール、学習支援など、教員を目指す学生たちと体験教育を通じた研究活動を行う。NPO法人、企業、教育委員会などと連携した社会貢献活動を行う。

また、特別支援サポーター育成として以下の講座を開講している。

- 基礎講座（初級）
- 領域別学び講座（中上級）
- 特別支援士（スペシャルサポーター）講座（上級）
- 先生のための特別支援士（スペシャルサポーター）講座

問い合わせ▶サポーター育星プロジェクト研究協会事務局
Mail : ikusei@hoshiyama-lab.com



受けられるかなのです。
日本は疲れ果てている母親にも、「あなたならできる」と追い立ててしまいがちです。お母さんだからできて当然と、母親を神格化してしまうのです。ただお母さんも一人の人間ですし、核家族でひとりぼっち。頑張れというだけでなく、安心できるように支えなければなりません。育てにくいお

いているお母さんは今でもたくさんいます。そんなお母さんたちをなくしたい。助けてほしい。笑顔にしたいという思いが大きいんです。あのときに私が子どもたちや親たちから教えてもらったものをたくさんの人に伝えて恩返ししたいと思っています。
少数派として生まれても、すてきなところがいっぱいある。この子たちはいろんなことを伝えるために生まれてきてくれたんだ。たくさんの人にそう感じてほしい、思い悩んでひとりぼっちで泣いているお母さんがいなくなればいいな、という思いを抱きながら、それを実現するためにどうしたらいいかと考えているうちに仕事がどんどん広がってきました。療育は専門家が少なくて特殊なことだと思われていますが、今では10人に1人が発達障がいがあるともいわれています。誰もがいろいろな障害について当たり前に知っていて、誰でもサポートできれ

地域の中にお母さんを支えるシステムを作りたい

ば誰も困らないのに、と思うのです。
—海外での支援と日本の支援はどのように違うのでしょうか。

星山 それはもう、大きく違いました。私がアメリカに行ったときには、アーリー・インターベンション（早期介入）という支援体制が整っていて、支援する側もされる側も、とても肯定的でした。「うちはアーリー・インターベンションで、家庭訪問もあってね、プレイルームにも行けるのよ」なんて、うれしそうに話しているお母さんを何度も見かけました。海外では、特別支援教育にギフト・エデュケーション（天才児教育）も含まれます。そのように聞くと、「特別」の意味が違って聞こえますよね。大事なのは診断ではなく、その後にとどれだけ丁寧なケアが

子どもたちの多様性を認め、障害について学び合い、たくさん大人のサポートを受けたい、社会の役に立ちたいという気持ちを持っていきます。大変な子育てをしていても、この経験が今度は誰かの役に立つんだと分かることで人は変わっていく。苦労したことが誰かの役に立つように、地域で人が育っていく循環をつくりたいと思っています。

子どもたちがいたたり、お父さんがいなかったり、いろいろな条件がありますから、地域でお母さんを支えるシステムが必要で。
子どもたちの多様性を認め、障害について学び合い、たくさん大人のサポートを受けたい、社会の役に立ちたいという気持ちを持っていきます。大変な子育てをしていても、この経験が今度は誰かの役に立つんだと分かることで人は変わっていく。苦労したことが誰かの役に立つように、地域で人が育っていく循環をつくりたいと思っています。

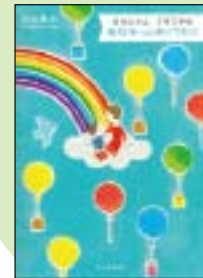
星山麻木さんの著書

『障害児保育ワークブック』
◎明文書林 / 1,995円（税込み）



保育士、保護者、子育て支援、教員や療育にかかわるすべての人を対象にまとめられた実践的な特別支援をワークを通して学ぶためのテキスト。発達、障害の特性、それぞれの支援方法、ケーススタディーなどを具体的に学ぶことができる。巻末には保護者アンケートも資料としてまとめられている。

『あなたへのおくりもの』
◎河出書房新社 / 1,470円（税込み）



母子手帳の続きとして使ってほしい、書き込み式子育て手帳。ワークシート形式になっているので、お母さん自身が読み進めながら、自分自身の心の動きなどを記入するうちに心が軽くなる。子どもが大きくなったら、いつかプレゼントしたい一冊。この冊子を使ったワークショップも行っている。

—今年さらさら、子ども家族早期発達支援学会も発足されましたね。

星山 サポーター育星プロジェクト研究協会として、東京都八王子市を中心に6年以上特別支援サポーターの育成活動をしてきました。これまでに約300人が地域で活躍しています。と

一般社団法人 こども家族早期発達支援学会

◎設立の趣旨（一部抜粋）

私たちは、早期発達支援や特別支援教育に関わる多くの人々や機関が、深い人間理解と信頼関係により結びつき、チームとなった保育・療育・教育の輪の中で、子どもと家族が生涯にわたって支援を受けられるような社会を目指します。

事業内容

- 人材育成
- 資格認定
- 学術集会の開催
- 学術誌の発行

次回研修会 ▶ 2013年12月7日（土）予定
詳細はホームページ参照 <http://kodomokazoku.jp>

でも大きな手応えがあったので、この動きを全国的に広げるために、昨年10月に「こども家族早期発達支援学会」を立ち上げました。現場の中堅の人たちにスーパーバイザーになってもらい、人材育成できるようにしていかなないと、いま困っている子どもたちやお母さんたちのサポートにはとても間に合いません。学校の先生、療育の先生、医療関係者、サポーターなど、さまざまな人をつなげる発達支援コーディネーターを全国レベルで育成したいと動き出しています。

親子の大切な時間をつくる音楽ムーブメント

—音楽療法やムーブメント療法を使っ
ての活動もされていますね。

星山 アメリカで音楽療法を学び、動きを通して子どもを育てるムーブメント療法を小林芳文先生（国際ムーブメ



大学の教育学部の学生、支援の必要な子どもたち、その家族とのキャンプも頻繁に行っている



実際の体験は大きな学びにつながる。2012年のフィンランド視察旅行では家庭的な雰囲気のある施設で学生と子どもたちが折り紙などで交流した

ント教育・療法学術研究センター所長に教わりました。音でアクセスできるお子さんといえば、動きでアクセスできるお子さんもいます。ふたつのいいところを集めて、クリエイティブ音楽ムーブメントというワークショップをいろいろなところで行っていきます。1993（平成5）年にコープとうきょうの文化講座で0歳の赤ちゃんを対象に親子音楽ムーブメント教室として2クラスからスタートしました。現在では40カ所以上に広がっています。

私が大事にしてきたこのワークショップの考え方の根底には、障がいのあるなは一切関係がないということがあります。むしろ支援の必要な子どもがいたらそれはウエルカムなことです。健常児のお子さんと一緒に、ダウン症や水頭症、自閉症のおさんが参加することも多いのですが、みんなが問題なくできるプログラムです。どんなお子さんでも分け隔てなく楽しめて、発達的にも意味があるものこそが、本当のプログラムだと思っています。

星山研究スタジオ

新しい実践研究を行うためにオープンした研究スタジオでは、親子ともに自尊感情を高め、だれもが安心して、楽しめることを目的に新しいセッションを試みています。学生とのキャンブ、ウィンタースクール、学習支援など、NPO法人や企業とも連携し、さまざまな楽しい地域に広がる活動を研究開発しています。クリエイティブ音楽ムーブメント、音楽ムーブメントヨガ、子育て発達相談、音楽療法+サポーターなども行っています。



お問い合わせ・お申し込みは星山研究スタジオ事務局までメールでご連絡ください。
【パソコン】 studio@hoshiyama-lab.com 【携帯電話】 musicmovement@docomo.ne.jp

家庭的な雰囲気 安心できる空間を作る

とにかく、かわり方は自由です。例えば、シャボン玉を飛ばして、「あーっ！」って言いながら親子で見つめている時間が、大きくなっても親子の間でしっかりと残っていく。そういうことを伝えられる内容にしています。海外ではこうした良質のプログラムがたくさんあるんですよ。日本では早期教育やお受験教室などが多いようすが……。競争や課題があったほうが大人には分かりやすいんでしょうね。せっかく生まれてきたお子さんですから、競争したり比べたりせず、お母さんと一緒にゆったりといい時間を過ごすことの大切さを、プログラムを通して伝えていきたいと思っています。

星山 2010（平成22）年秋には、新しい実践研究を行うために研究スタジオをオープンしました。自尊感情を

広く明るいスタジオの1階では、いろんな色や素材の布を天井から飾ったり、つなげたり。カラフルな葉っぱやキラキラ光る素材を使って、心のおもむくままに時間を過ごします。星山さんのピアノには、ピアノが弾けない大人も子どももピアノで応えてくれます。

高め、だれもが安心してきて楽しめることを目的に新しいセッションを試みています。現在はクリエイティブ音楽ムーブメントのほかに、親子でのヨガや子育て発達相談、音楽療法なども行っています。

欧米の療育センターやカウンセリングセンターは、外観が普通の一軒家で、医師も白衣は身につけません。ここも、子どもたちが療育に来るのではなく、友だちのお家に遊びにくるようなイメージで来られるといいなと思います、デザインしました。「お母さん、あそこでまたパーティーやりたい！」って言うお母さんもいるんですよ。療育センターに入れない自閉症のお子さんも、ここには抵抗なくずっと入れまして、中にはお風呂に入っちゃうお子さんまでいます。

1階はピアノや広い空間があるスタジオで、2階では普通の家庭のような温かい雰囲気の中で、紅茶やコーヒー

を飲んでお菓子を食べながら、お話をしたり相談を受けたりできるようになっています。その合間には子どもたちも1階でおねえさんたちと遊んでいるんですが、時々2階に上がってきてお母さんがリラックスしている様子を見て、安心してお菓子をつまんでまた下りていきます。お母さんたちも居心地がよさそうですね。

お母さんだけのプログラムでは、言葉では悲し過ぎて言えないことを布などで表現したり、ピアノで表現したりします。人は、悲しみや悩みがあるとき、非言語のほうで癒されることがあります。いつもと違う時間、違う空間で自分を取り戻したかったり、心の傷を癒したかったりするときには、非言語のほうがいいかもしれません。

保健師さんとかかわりはあります。

星山 健診のフォローアップなどにかかわることがありますね。保健師さんは、ベースはもちろん持つていらつしゃいますが、療育やサポートの仕方をぜひ詳しく知っておいてほしいと思います。現場に出てからでも身につけられる分野ですし、支援を待っている方がたくさんいますので、ぜひお待ちしています。

私はいつも、「特別支援教育は人間理解の教育だ」と、先生方にもお母さんたちにも伝えていきます。その子に合ったサポートの仕方を私たちが学ぶことは、どの子にとつても必要なことだと思います。支援の必要な子どもは私たちに大切なことをたくさん教えてくれます。療育には、子育てや保育の原点が凝縮されているのです。

どうぞ、みなさん、特別支援教育についていろいろな機会をつかんで、学んでください。すべての人間理解につながり、みなさんの力になるはずですよ。

子育てワークショップ レインボーパレット

市政と企業のコラボレーションによって誕生した施設の一角で、星山さんによる子育てワークショップ「レインボーパレット」が行われました。告知もなく、そのときに遊びにきていた親子に向けて行われましたが、30分のワークショップを終えるとお母さん子どもたちもすっかり笑顔に。わらべ歌あり、バルーン遊びありの盛りだくさんなプログラムを紹介します。



♪
どんぐり
ころころ♪

キドキド×ゆめきっず



東京都八王子市とポーネルド社（企業）のタイアップで2012年秋にオープンした施設。ポーネルドの室内あそび場キドキドでは体を使ったさまざまな遊びが体験できる。八王子市民は3歳まで「親子つどいの広場ゆめきっず」のみ無料で利用可能。今後も同様のワークショップや、「おとなのドキドキ体験」などを開催中



♪
どんぐりころころを歌いながら、「好きなボールを持って、転がします！」



「頭の上のせてみよう！」



大きなバルーンがどこからか出てきました。ふんわり動くバルーンにみんな大はしゃぎ。みんなで中にすっぽり入ってしまいます。中からはどんなふうに見えるのかな？バルーンの端をみんなで持って、ボールをいっぱい入れて波をつくると……ボールが生きてみたい！



ワークショップが終わると、スペシャルサポーターや星山さんに発達や育児、悩みの相談などもできました

